

ミューラー・アルマック研究序説

——彼の実践活動と著述活動——

大庭治夫

目次

- 一 序
- 二 概説
- 三 実践活動
- 四 著述活動
- 五 結語

一 序

著者は今迄いろいろな機会に——本誌においても——恩師ミューラー・アルマックを採り上げて論じたことがあったが、まだ彼の全体像を一論文にて紹介したことはなかった。本来ならば、一番最初に彼の全体像を紹介するのが順序として当然だったであろうが、従来それぞれの論文の主題との関連において彼の断片的な部分像を描写するに止まってしまうことは、ある意味でやむをえないことでもあった。そこで今回は「ミューラー・アルマック研究序説」と

題し、彼の人柄と業績とを全体的に紹介することにより、我国では一部の人を除いてほとんど知られていない彼の全体像を浮彫りにしてみたいと思う。筆者は、かねがね彼のことを全然知らない方々に対しては、ミューラー・アルマックを「第二のマックス・ヴェーバー」と称することによって彼の特徴を説明することを常としている。以下の叙述を読んで戴ければ、そのような説明の仕方にも一理あることが判明し、それを少なからざる方々が首肯して下さるものと期待している次第である。

さて、本論に入る前に筆者の個人的な思い出を述べて戴きたい。筆者が最初に彼の姿を見たのは、今から約十年前(一九七〇年)の夏のことであった。当時たまたま西独南部の都市ミュンヘンにおいて開催されたモンペルラン協会の世界大会に筆者が初めて参加したとき、我国でも知られているエアハルト元西独経済相(のち首相)と親しく話合っている人を見かけた。彼が、ほかならぬミューラー・アルマックだったのであるが、私はそれを知る由もなかった。そこで筆者は、もっぱらエアハルトにのみ、挨拶したり、日本ではなじみの薄く「Gesellschaftspolitik」(社会構造政策)について質問したりしていた。その後も、エアハルトとは一緒に写真を撮ってもらったりして親しくさせて戴いたが、ミューラー・アルマックとは言葉を交すこともなかった。

それから二年後、筆者はD A A D(ドイツ大学交換奉仕会)の西独政府給費留学生として家族と共に西独において六年間の留學生活を送ることとなった。そこで大学時代から西独経済政策論「社会的市場経済」を勉強してきた筆者は、この良い機会に当該概念の創唱者ミューラー・アルマックから直接に指導を受けたいと思ったが、彼が既に退官しておられたこともあり、また諸般の事情もあって、ルール大学ポッフムに留学先を決めた。筆者は、ルール大学において諸先生の良き指導にあずかることが許され、当大学のみならず隣町に新設されたドルトムント大学の教授からも

個人的な指導を受ける機会に恵まれたのであった。しかし、それにもかかわらずミュラー・アルマックからも指導を受けたという思いは消えうせなかったため、ある日その旨を手紙に認めて彼に出したところ、暫くして彼から快諾の返事を頂戴し、それ以来しばしばケルンに彼を訪ねることとなったのであった。当時、彼は前述の如く、大学の教壇からは既に退いておられたが、御自分が創設したケルン大学付属経済政策研究所所長として活躍しておられた。

爾來五年、筆者は彼の好意によりケルン大学、研究所、商工会議所等におけるゼミナール、研究会、シンポジウム等に可能な限り出席し、彼の警咳に接することを許されたのであった。あまつさえ筆者は、彼の推薦により、ケルン経済政策研究会およびエアハルト協会の準会員にさせて戴く光栄に浴し、今は亡き教授に感謝している次第である。ちなみに、ケルン大学付属経済政策研究所が発行している季刊誌とエアハルト協会が発行している定期刊行物は、今日もなお郵送して戴いている。峻厳かつ頑固一徹の中にも深く激しい愛を秘めた教授との思い出は尽きない。このような師弟関係にある筆者が、恩師ミュラー・アルマックを以下においてどこまで客観的に叙述できるかは一つの問題となりうるであろうが、その点は御寛恕いただくことにして、以下では目次の順に従って考察を進めてゆくことにしよう。

但し、彼の著述活動に関しては質・量ともに十分な紹介ができなかったことを予め申し上げておかねばならない。それは、筆者の能力の限界にもよるが、広範多岐にわたる彼の多数の著書・論文を限られたスペース内で紹介すること自体、最初から無理なことと言わねばなるまい。それゆえ、不備な点は後日、補われうることを期したい。

二 概説

ミュラー＝アルマックの實踐活動および著述活動を考察する前に、まず彼の略歴および西独における彼の評価を紹介しておきたい。けだし、それによって、筆者が敢えてミュラー＝アルマック研究を試みる意味・理由が明らかとなるうし、かつ以下の考察および理解が容易となるうからである。

まず最初に彼の略歴を見ると、彼は一九〇一年六月二八日にエッセン市に生まれ、一九一九年まで同市のゲーテシユールレに行き、その間ハイネマン元大統領と友達になっている。その後ギーセン、フライブルグ、ミュンヘン、ケルンの諸大学に学び、一九二三年（当時二二歳）にケルン大学で Dr. rer. pol. の学位を授与され、一九二六年（当時二五歳）には大学教師資格獲得（Habilitation）となっている。その後彼は、一九三四年（当時三三歳）にケルン大学の無給教授（außerplanmäßiger Professor）、一九三八年（当時三九歳）にミュンスター大学の員外教授（außerordentlicher Professor）となり、さらに一九四〇年（当時三九歳）にはミュンスター大学の正教授となったが、一九五〇年（当時四九歳）には母校ケルン大学の正教授に就任している。^①

次に、彼が今日もなお西独で高く評価されている理由を考えてみると、まず第一に挙げられる要因は、彼がエアハルトと共に「ドイツの経済奇跡」（Deutsches Wirtschaftswunder）の理論的基礎を築き、それを発展させたことである。この点に関しては、残念ながら我国ではエアハルトの名前だけが知られている反面、影の立役者のことはほとんど知られていない。しかし実際は、エアハルトといえども、ミュラー＝アルマックという良き協働者なかりせば充

分な成果を収めることができなかつたであろう。当時の経済相エアハルトにとってミュラー＝アルマックの存在がそれほど大きなものであったことは、エアハルトのみならず、多くの西独の経済学者が等しく認めるところである。そして、その理由は、当時エアハルトが経済相、ミュラー＝アルマックが次官であったことと無関係ではない。それは、ミュラー＝アルマックが最初に「社会的市場経済」という新語を提唱し、これをエアハルトが実践したということに止まらず、エアハルトが一九六三年に首相になるまで常に、彼の重要な経済政策のほとんどすべてをミュラー＝アルマックが立案したことを意味する。これこそ、世界に知られた「ドイツの経済奇跡」は、エアハルトとミュラー＝アルマックの二人によって実現されたと言われる所以である。

最後に、筆者がミュラー＝アルマックを「第二のマックス・ヴェーバー」と称する理由が明らかにされる必要がある。それは、まず学問的理由で、ミュラー＝アルマックがマックス・ヴェーバーの宗教社会学的研究を継承発展させた点に存する。すなわち、マックス・ヴェーバーの有名な論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」から決定的な影響を受けたミュラー＝アルマックは爾来、文化社会学なканずく宗教社会学に多大の関心を持ち、多くのすぐれた諸労作を発表したのであるが、その中の一労作「東欧の宗教社会学のために」は、マックス・ヴェーバーの方法および立場に依拠しつつ、東欧における宗教と経済との関係——宗教倫理と経済意識との関係——を解明した稀有の労作として、西独では今日もなお高く評価されている。しかし、両碩学の類似点ないし共通点は、それらの研究労作において見られるに止まらず、さらに学問および歴史的现实に対する基本姿勢においても見出されるように思われる。なかなずく両碩学の内奥に秘められた激しい真理愛・真実愛・祖国愛は、両人の精神を理解する上で決して看過されてはならぬ共通要素である。ちなみに、ヴェーバーが「職業としての学問」および「職業としての政治」

において、またミュラー＝アルマックが「職業としての経済政策」において各自の真情を吐露したことは、上に述べたことと無関係ではない。^② 一般に経済学者ないし社会学者の根本思想や基本認識、さらには「精神」とよばれるものを正しく理解することは、それを評する者にとって至難の業である。しかも、そのように苦心してまとめられた解釈といえども、それが必ず多くの人の賛同を得られるとは限らない。しかし、それにもかかわらず、それを究明せずにはおれないという心境は、真理を探究する少なからざる者が一人の偉大な思想家を研究する際に等しく経験するところであろう。しかも、その一人の思想家が学界において正当な評価を受けるのに要する時間は異なりうる。ましてや国境を越えた外国において理解されることは、決して容易なことではない。果してミュラー＝アルマックが本当に「第二のマックス・ヴェーバー」と評されうるや否やは、今後に残された課題であろう。しかし、かかる解釈が決して事実無根でないことは、以下の叙述によっても諒解されえよう。

注

- ① Vgl. Die Hochschullehrer der Wirtschaftswissenschaften in der Bundesrepublik Deutschland, Österreich und der deutschsprachigen Schweiz — Werdegang und Schriften —, Hsg. v. der Gesellschaft für Wirtschafts- und Sozialwissenschaften, 2. Aufl., Berlin 1966. S. 505 ff.
- ② Müller-Armack, Alfred, Auf dem Weg nach Europa — Erinnerungen und Ausblicke —, Tübingen und Stuttgart 1971. S. 9-18.

三 実践活動

まず最初に、終戦前におけるミュラー＝アルマックの実践活動を見ると、彼は一九四一年、ミュンスター市に市場経済研究所を設立し、その関係で当時すでに後年の上司エアハルトと面識を得ている。^①しかし終戦前において特筆すべき活動は、ナチズムの現実に対する懐疑と批判から着手したと思われる宗教社会学的研究であろう。彼は、たまたま戦時に旅行を許された東欧三カ国（ハンガリー・ルーマニア・ブルガリア）に産業視察委員として派遣された機会に、有名なハンガリーの経済学者スラニー＝ウンガーと知合になり、ハンガリーの経済状態のみならず、宗教および教会の実態をも知ることができた。^②ところが西欧におけるマックス・ヴェーバーの宗教社会学的研究がハンガリーに該当しないことを知り、これに深い関心を抱いたミュラー＝アルマックは、それから東欧における宗教と経済の状態および両者の関係を究明する必要性を強く感じたに相違ない。ついでルーマニアとブルガリアを具に見聞した彼は、ギリシャ正教の実態を更に一層広く知ることができ、それが西欧におけるキリスト教と非常に異なっていることを確認することができたのであった。その意味において、この東欧視察旅行は、ミュラー＝アルマックにとって極めて貴重な経験となったのであり、また彼がヴェーバーの宗教社会学的研究を継承・発展させる基盤を形成することになったのである。

次に、同じく終戦前における彼の実践活動で特筆すべきは、彼がフライブルグ学派やヴァイサー学派などとも関係をもちつつ、しかもなおかつ自分自身の立場と方向を求め続けたことである。^③結局それが、後年「社会的市場経済」

として結実するのであるが、それに至るまでヴァルター・オイケンやアドルフ・ラムペのほかゲルハルト・ヴァイサーやヴァルター・ホフマンなどの経済学者と接触をもち、さらにはハイネマンの主宰する会合にも積極的に参加し、宗教社会学ならびに「社会的市場経済」の基礎研究を進めた。これらの参加活動を通して、宗教と経済との関係に関する彼の研究の基盤は一層固められ、かつ自由主義に対する積極的評価も不動のものとなった。

さらに彼は、後年「回顧録」の中で、彼が当時すでにモンペルラン協会の会員となったことが実に有益かつ名譽なことであったと記している^④。このことからしても、その当時は今以上にモンペルラン協会の会員になることが容易でなかったものと察せられる。前掲書の中で彼は、それによって彼がドイツ国内のみならず国際的にも、多くの自由主義的経済学者と広汎な接触を持つことができ、国際的視野を広めることができたと述懐している。

かかる事情を背景に、我々は今や彼の経済省次官としての活動に考察を進める。一九四八年、エアハルトを中心に通貨改革が断行され、それが成功したことは周知の事実である。その後、彼は一九五二年十月、エアハルトの懇請により経済省経済政策部長として主に政策原案作成部門の指導を担当することになり、さらに一九五八年以来エアハルトが首相となった一九六三年十月までは経済省次官として、文字通りエアハルトの片腕となって活躍したのであった^⑤。政治の世界を多少なりとも知っている人は首肯して戴けると思うが、一九五二年から一九六三年までの約十一年間は、彼にとって最も多忙を極めた年であったはずである。なかならず当時の経済省次官の仕事は、ドイツ再建の中心にかかわるものであり、かつ緊急を要する性質のものであった。そもそも舞台裏における次官の仕事は、想像を絶するほど多忙かつ重要であり、政策に関する大臣の重要な言動が実質的にはほとんどすべて次官レベルで立案作成されることは周知の事実である。案の定、彼の場合も例外ではなく、大学に関するとは異質の仕事に彼は日夜追われる

身となったのであった。そこで以下において、彼が手がけた仕事のうち特に重要と思われるものを重点的に紹介してみることしよう。

まず彼は、一九五二年の秋にモンタン・ユニオン調査のため隣国ルクセンブルグに赴いた。^⑥それは、当時まだ彼が当該領域の管轄責任者になっていなかったにもかかわらず、原則として彼が自分の関係していた国際機関をすべて事前に下調べすることにしていたためである。しかし彼が次官として正式に欧州経済共同体（EEC）の予備会談に出席したのは一九五三年の晩夏、ローマにおいてであった。

その後一九五四年、フランスの拒否権発動によって、欧州防衛共同体に関するEECの予備会談は一頓挫を余儀なくされたが、それにもかかわらず、西独においては依然として欧州統合に向っての努力が進められた。無論その方法や具体的措置に関しては西独内部においても様々な異なった意見が出されたために調整が図られねばならなかった。そこで当時のエアハルト経済相とエッツェル蔵相とによって運営された部会を統一的同一線上にもたすため、ここにミュラー＝アルマックは、主要な論客は「ルクセンブルグとボンとから等距離に位置すべく」秘密会議に赴くべきであるという提案を行なった。それに最も適した場所として、彼はミュンスタールアイフェルのアイヒャーシャイドにある彼の小さな農家を提供し、そこに一九五五年五月、多くの優秀な論客を迎えたが、参加者は彼のほかエアハルト、エッツェル、ブレンターノ、オプフェルス、ヴェストリック、ルスト、レーグル、フォンデアグレーベンの九名であった。そして、その結果は、彼の予想通り上首尾であったという。^⑦かねてより欧州統合に関しては、機能的側面を重視する者と制度的側面を重視する者との間に不一致が存したのであるが、ミュラー＝アルマックの活躍による「アイヒャーシャイド決議」によって両者の調整がなされたのであった。この決議で注目されるのは、彼自身が欧州

投資銀行と欧州大学の設立を提案したことである。これは同年六月、イタリアのメッシナにおいて六カ国外相会議が開催されたとき、当時の外務次官ハルシュタインが西独側を代表して提案したが、一方において欧州投資銀行設立案は採択され、他方において欧州大学設立案は見送りとなった。いずれにせよ、ミユラーアルマックは、欧州統合への道が二年たらずで開かれつつあることをわがことのように喜んだのであった。^⑧

このメッシナ決議に基づき、同年の夏にはブリュッセル予備会談が開催されたが、議長はベルギー外相スパークが担当した。そこでスパークの下に、六カ国から構成される様々な委員会および付属委員会がもたれたが、ミユラーIIアルマックも参加した様々な委員会の努力の結果、それから二年以内にEEC条約とユーラトム条約とが成立したのであった。そこで以下においては本稿の主題との関係上、特にEEC条約を中心に考察してみよう。^⑨

まず一九五六年の後半に条約案の正式化が進められ、翌一九五七年の秋にはパリで第一回の各国閣僚会議が開催され、西独側からはエアハルトとシュトラウスが代表として出席したが、交渉は結局、最終的合意を見るには至らなかった。それ以後も時には夜を徹して交渉が行なわれたが、当時経済省次官の要職にあったミユラーIIアルマックの心労は想像を絶するものがあったに違いない。しかし、その労は決して徒労ではなかった。

かくて一九五七年三月二五日、ローマにおいて晴れてEEC条約は締結されたのであった。周知の如く、これが一般に「ローマ条約」とよばれるものであるが、このローマ条約が締結されるのを眼前に見たミユラーIIアルマックの胸中は、果していかにばかりであったろうか、察するに余りあるものがある。ついで同年七月、ローマ条約は西独の議会において批准され、少し遅れはしたが他のEEC諸国においても無事に批准されたのであった。かくて翌一九五八年元日、ローマ条約は発効し、西独側の責任者エアハルトおよびミユラーIIアルマックは、欧州統合の積極的推進者

としての大役を果し終った喜びを満喫することができたのであった。

しかし我々は、この期間中、ミュラー＝アルマックの国際的な実践活動が EEC のみならず、他の欧州諸国との関係改善のためにもなされていたことを看過してはなるまい。たとえば彼は、一九五四年十一月に十日余りギリシャとユーゴスラヴィアを歴訪している。^⑩これは本来エアハルト経済相の東欧訪問旅行であるが、そのさい次官ミュラー＝アルマックも同行し、ユーゴスラヴィアに三日間、ギリシャに九日間滞在し、具に実情を見聞して国際的視野を広めることができたのであった。まず最初の公式訪問国ギリシャにおいては、ギリシャの EEC 加盟問題を中心に話合いがなされたが、その機会に彼はアテネ大学学長のブラツイオティス神学部教授から正式に招待を受け、そこで彼は彼の宗教社会学に関する講演を行ない、両国の学术交流を深めることに大いに貢献したのであった。結局 EEC 加盟問題は保留となったのであるが、拡大 EEC に対するエアハルトおよびミュラー＝アルマックの基本的態度は理解されたようである。次の訪問国ユーゴスラヴィアにおいては、チトー大統領じきじきの歓迎会を受け、いろいろと突込んだ話合いが行なわれた。そのさい市場経済と統制経済についても腹藏ない話合いが行なわれたことは、ミュラー＝アルマック自身が記すところから明らかである。

さらに翌一九五五年には、コンスタンチンノーブルで IMF と世銀の年次大会が開かれ、これに西独側からはエアハルト経済相が出席し、これに次官ミュラー＝アルマックも同行している。^⑪ここでも彼は鋭い洞察力を発揮し、トルコの経済政策原理は西独と異なり、諸般の事情から推して将来も容易には変わりえないことを見抜いている。それは要するに、経済秩序にかかわる問題であり、交換性 (Konvertibilität) や関税引き下げ、さらには「国民的包被」(nationale Abkapselung) や為替管理の伝統が改まらない限り、トルコの経済的安定均衡は達せられないといので

ある。

同じく一九五五年の出来事で特筆さるべき事柄は、アデナウアーが初めてモスクワを訪問するための下準備をミューラー＝アルマックがしたことである。アデナウアーの意図は、東欧との経済・文化交流の拡大であったが、そのためエアハルト経済相と次官ミューラー＝アルマックは、経済関係の準備作業に取組んだのである。本来ならば、まず外務省が一般的・抽象的表現で経済・文化交流の拡大を手際よく作文するところであろうが、依頼を受けたミューラー＝アルマックは、大胆にも両経済体制の核心に触れるような根本問題を単刀直入に記述し、しかも上司エアハルトの諒解を得て直接アデナウアーに手渡したのであった。これを見ても、アデナウアー首相が次官ミューラー＝アルマックを大いに信頼していたことが容易に察せられるが、その翌々日、彼は外務次官からアデナウアーが殊のほか御満悦であったことを報され、ここに彼は大役を無事に果たすことができたことを確認することができたのであった。

さらに一九六一年八月、ミューラー＝アルマックは上司エアハルトに同行してスペインとポルトガルを公式訪問した。^⑬ いずれも両国がEECに加盟する諸条件を調査するため、また両国に対する経済援助の問題を討議するためであったが、それに加えて両代表は、世界的に注目を浴びた「ドイツの経済奇跡」が両人の努力による「社会的市場経済」の導入によってもたらされたものであることを説明する意図もあつたようである。まず最初の訪問国スペインにおいては、フランコ總統じぎじぎの歓迎を受け、双方の間でスペイン経済の発展のための経済政策についても話合われたが、民間企業のイニシアティブが欠如していることは、フランコ自身によっても指摘されたところであり、今後の対策が案じられたという。また次の訪問国ポルトガルにおいても同様に大歓迎を受けた西独代表は、ポルトガルのエアハルトと称されたサラザールを訪ねたが、元財政学教授サラザールとの会見は、政治家同士の会見というより

は、むしろ『教授同士の話し合い』(Professorengespräch)と言った方が適切な雰囲気であったという。そこでもポルトガルのEEC加盟の諸条件が主要問題として採り上げられたが、これに対してサラザールは前向きな姿勢を示し、さらに西独経済再建の模様に熱心に聞いていたとのことである。ただし、ポルトガルもスペイン同様、民間企業のイニシアティブが欠如しているゆえ、当該問題を解決することが当面の課題だったからである。サラザールの見解を聞いたミュラー＝アルマックは、率直に言って、サラザールの努力が実って実現されたポルトガル通貨の安定が、果してポルトガルの国民経済全体の近代的成長のために十分な条件として存続しうるか否かに疑問を抱いたそうである。いずれにせよ、かつては海上制覇によって繁栄を極め、多くの植民地を支配下に置いたスペインとポルトガル両国が今日、EECに加盟するためには多くの諸問題を事前に解決せねばならないこと、またそのためには相当の長期間を要することをエアハルトもミュラー＝アルマックも痛感したことであろう。しかし、そのような諸困難にもかかわらず、当時の西独経済相および次官は、拡大EECに向っての努力を惜しまなかったのである。

注

- ① Müller-Armack, Auf dem Weg nach Europa, S.21.
- ② op. cit. S.19—35.
- ③ op. cit. S.36—46.
- ④ op. cit. S.44.
- ⑤ op. cit. S.52—58.
- ⑥ op. cit. S.63.
- ⑦ op. cit. S.99 ff.
- ⑧ op. cit. S.102.

- ⑨ op. cit. S.104—120.
- ⑩ op. cit. S.131—142.
- ⑪ op. cit. S.143—148.
- ⑫ op. cit. S.78—90.
- ⑬ op. cit. S.149—164.

四 著述活動

ミューラー＝アルマックの著述活動は、誠に広汎多岐にわたるが、ここではスペースの関係上、全作を詳論することは不可能であるゆえ、彼の諸著作の全般的傾向を知ることには当座の目標をしばらくしたい。そのさい以下においては、彼の著作を文献解題ないし文献目録の形で紹介することが多いことを予めお断わりしておく。但し、主要著作は可能な限り詳論するつもりである。

(I) 著書

- (1) 『理論的社會經濟学における恐慌問題』(一九二三年)^①
- (2) 『景氣政策の經濟理論』(一九二六年)^②
- (3) 『資本主義の發展法則』副題「近代的經濟制度に対する經濟学的・歴史理論的・社會学的研究」(一九三二年)^③
- (4) 『經濟様式の系譜』副題「一八世紀末に至る國家・經濟形態の精神史的起源」(一九四四年)^④
- (5) 『經濟統制と市場經濟』(一九四七年)^⑤但し論文集

- (6) 『経済的狀態の診断のために』(一九四七年)^⑥
- (7) 『神なき世紀』副題「現代の文化社会学のために」(一九四八年)^⑦
- (8) 『現代の診断』副題「我々の精神史的位置の規定のために」(一九四九年)^⑧
- (9) 『宗教と経済』副題「我々の欧州生活形態の精神史的背景」(一九五九年)^⑨ 但し論文集
- (10) 『社会的市場経済研究』(一九六〇年)^⑩
- (11) 『欧州への途上』副題「回顧と展望」(一九七一年)^⑪
- (12) 『社会的市場経済の系譜』副題「初期の論文とその後の諸概念」(一九七四年)^⑫ 但し論文集

まず第一作『理論的社會經濟学における恐慌問題』は、彼が二二歳の時に提出し受理された学位論文(Dissertation)、また第二作『景氣政策の經濟理論』は、彼が二五歳の時に書き上げた「大学教師資格獲得のための論文」(Habilitationsschrift)であり、いずれもドイツにおいて学者として出発するために必要不可欠とされた試験のためのものである。第三作『資本主義の發展法則』は、副題に見られる如く、近代の經濟制度の學際研究であり、唯物史觀批判を意図した労作である。これらのことから明瞭に看取されううことは、彼が景氣政策論者としてつとに認められたことに加えて、当初から學際研究的な問題意識を有していたことである。この傾向は、後半になるにつれてますます強くなり、經濟學者としてのみならず、社會學者としてもまた不動の地位を確立するに至ったほどである。第四作『經濟樣式の系譜』は、終戦の前年に発表されたものであるが、ここに見られるものはヨーロッパ精神史研究である。しかも彼が「經濟樣式」なる概念に特別の意味を見出し、これを彼の經濟学の基本概念として用いたことは、終生変わらぬところであった。ただし、彼は常に經濟の關係論的考察を試み、それによって生活の統一的連関を解明せんと欲した

のであり、そのためには「経済様式」なる概念が最も適切であると判断したのであろう。以上が、彼の著作のうち、終戦前に発表された諸労作であるが、次に戦後発表されたものを概観してみることしよう。

前掲著作リストの第五作『**経済統制と市場経済**』は、彼が岐路に立つ敗戦国ドイツの経済再建を念頭に置いて書いたものであるが、そこで取扱われている経済様式の基本形態は、書名から察せられる如く、ヴァルター・オイケンの経済秩序類型と同様——同一ではないにしても——のものと言えよう。筆者の理解が正しければ、ここに初めて「社会的市場経済」なる概念が登場するのであるが、それについての説明は各論的に論じられている。その意味においては、本書が「社会的市場経済」の理論的基礎と公式的表現を与えた最初の労作と言えるわけで、その後の西独経済政策の指導理念は、ここに文献の源泉を有すると言えよう。これに対して第六作『**経済的状態の診断のために**』、第七作『**神なき世紀**』、第八作『**現代の診断**』、第九作『**宗教と経済**』の四著書は、書名から察せられる如く、文化社会学のヨーロッパ精神史研究である。これらは、いずれもマックス・ヴェーバーやレプケの諸労作に負いつつも、それらに匹敵する水準の内容を有している労作として注目に値しよう。ついで第十作『**社会的市場経済研究**』は、書名の通り、彼の新概念「社会的市場経済」に関する彼の諸見解をまとめたものであり、当該概念のエッセンスが明解に叙述されたものとして評価されよう。さらに第十一作『**欧州への途上**』は、副題から察せられる如く、彼が経済省次官としてEEC設立のために献身的な働きをした過去の回顧と将来の展望とを書きとめたもので、EECの成立過程ならびに彼の手柄と業績を知る上で貴重な文献となっている。最後に第十二作『**社会的市場経済の系譜**』は、おもに今まで論文集に収録されなかった論文を一冊にまとめたものであるが、そのうちの点数はすでに前掲諸著書に掲載されたものである。

以上、我々はシュラーアルマックの著書を概観してきたが、実は理由があつて終戦前に書かれた一冊の著書は紹介されなかった。それは、著者自身、自分の著書目録に入れていない故、ここでも割愛されねばなるまい。¹³⁾

注

- ① Das Krisenproblem in der theoretischen Sozialökonomik, Köln 1923.
- ② Ökonomische Theorie der Konjunkturpolitik, Leipzig 1926.
- ③ Entwicklungsgesetze des Kapitalismus. Ökonomische, geschichtstheoretische u. soziologische Studien zur modernen Wirtschaftsverfassung, Berlin 1932.
- ④ Genealogie der Wirtschaftsstile. Die geistesgeschichtl. Ursprünge der Staats- u. Wirtschaftsformen bis zum Ausgang des 18. Jhdts, Stuttgart 1944.
- ⑤ Wirtschaftslenkung u. Marktwirtschaft, Hamburg 1947.
- ⑥ Zur Diagnose der wirtschaftl. Lage, 1947.
- ⑦ Das Jahrhundert ohne Gott. Zur Kultursoziologie unserer Zeit, Münster 1948.
- ⑧ Diagnose unserer Gegenwart. Zur Bestimmung unseres geistesgeschichtl. Standorts, Gütersloh 1949.
- ⑨ Religion u. Wirtschaft, Geistesgeschichtl. Hintergründe unserer europäischen Lebensform, Stuttgart 1959.
- ⑩ Studien zur Sozialen Marktwirtschaft, Köln 1960.
- ⑪ Auf dem Weg nach Europa. Erinnerungen und Ausblicke, Tübingen u. Stuttgart, 1971.
- ⑫ Genealogie der Sozialen Marktwirtschaft. Frühschriften und weiterführende Konzepte, Bern u. Stuttgart 1974.
- ⑬ Staatsidee und Wirtschaftsordnung im neuen Reich, Berlin 1933. 大庭裕夫「西独経済政策論『社会的市場経済』の精史的考察」(国士館大学『政経論叢』二八・二九合併号、一九七九年四月)を参照された。

(II) 論文

以下においては、スペースの関係上おもに一九六四年までの諸論文を紹介するが、それらは、(一)辞典および記念論

文集などに寄稿した論文、(二)雑誌類に寄稿した論文、に二分類される。

(一) 辞典および記念論文集に掲載された論文

- (1) 「景気研究と景気政策」(一九二三年)^①
- (2) 「銀行経済の分野における公企業」(一九三一年)^②
- (3) 「景気研究の現状と将来」(一九三三年)^③
- (4) 「我々の文化諸形態の年輪」(一九四八年)^④
- (5) 「歴史における信仰の力について」(一九四九年)^⑤
- (6) 「諸経済秩序における依存と独立」(一九五一年)^⑥
- (7) 「精神的・経済史的に見た欧州の統一」(一九五一年)^⑦
- (8) 「社会的市場経済の様式と秩序」(一九五二年)^⑧
- (9) 「社会的市場経済」および「宗教社会学」(一九五二年)^⑨
- (10) 「欧州統合の諸問題」(一九五七年)^⑩
- (11) 「人間・精神・歴史」副題「人間的歴史学考」(一九六〇年)^⑪
- (12) 「社会科学的人間学考」(一九六三年)^⑫
- (13) 「マックス・ヴェーバーを顧慮した学問範型の変化」(一九六四年)^⑬
- (14) 「欧州——我々の課題」(一九六四年)^⑭

まず第一論文「景気研究と景気政策」は、彼が弱冠二二歳の時、ドイツで極めて権威のある『国家諸科学辞典』の第四版に執筆したものである。これによって、彼は若くして景気政策研究家として認められ、名をなしたのであった。第二論文「銀行経済の分野における公企業」は、社会政策学会刊『公企業の近代的組織諸形態』第二部に寄稿されたものである。第三論文「景気研究の現状と将来」は、同一書名のシュビートホフ記念論文集に掲載された労作である。以上の三論文は、いずれも終戦前に発表されたものであるが、次に我々は戦後の論文を概観することにしよう。

第四論文「我々の文化諸形態の年輪」は、レオポルト・フォン・ヴィーゼ記念論文集『社会学研究』に寄稿されたもの、また第五論文「歴史における信仰の力に関して」は、『信仰と研究』に掲載されたもので、いずれも文化社会学および宗教学について彼が戦時中に勉強した研究の成果である。ついで第六論文「社会生活における依存と独立」は、『社会科学および行政学研究所刊行叢書』第一号に執筆されたものである。さらに第七論文「精神的・経済史的に見た欧州の統一」は、クスケ記念論文集『欧州——遺産と委託』のために、また第八論文「社会的市場経済の様式と秩序」は、デーゲンフェルト・シヨーンブルグ記念論文集『経済的發展と社会的秩序』のために執筆された労作である。なお第九番目に挙げられた事項説明「社会的市場経済」および「宗教社会学」は、いずれも『社会科学辞典』に掲載するために書かれたものである。第十論文「欧州統合の諸問題」は、エアハルト記念論文集『自由世界の経済問題』に寄稿された労作である。第十一論文「人間・精神・歴史」は、ゼーゲン記念論文集『形態と信仰』のために、また第十二論文「社会科学の人間学者」は、ヴァイサー記念論文集『社会科学と社会形成』のために、さらに第十三論文「マックス・ヴェーバーを顧慮した学問範囲の変化」は、ベッケラート記念論文集『社会科学および経

済学における体系と方法』のために執筆された労作である。そして最後に第十四論文「欧州——我々の課題」は、『欧州経済憲法への可能性と道』に掲載されたものである。^⑤

注

- ① Artikel “Konjunkturforschung u. Konjunkturpolitik”. In: Hwb. d. Staatswiss., 4. A. Jena 1923 ff.
- ② Die öffentl. Unternehmung im Gebiete der Bankwirtschaft. In: Moderne Organisationsformen d. öffentl. Unternehmung. II. Teil: Dt. Reich, München 1931 (=Schr. Ver. Sozpol. 176/II)
- ③ Beitrag in: Der Stand u. die nächste Zukunft der Konjunkturforschung, Festschrift f. A. Spiethoff, München 1933.
- ④ Wachstumringe unserer Kulturformen. In: Studien zur Soziologie I. Festgabe f. L. v. Wiese, Mainz 1948.
- ⑤ Über die Macht des Glaubens in der Geschichte. In: Glaube u. Forschung, Gütersloh 1949.
- ⑥ Abhängigkeit u. Selbständigkeit in den Wirtschaftsordnungen. In: Abhängigkeit u. Selbständigkeit im sozialen Leben, Köln 1951 (=Schr. d. Forschungsinst. f. Sozial. u. Verwaltungswiss. 1)
- ⑦ Die Einheit Europas, geistes- u. wirtschaftsgeschichtl. gesehen. In: Europa, Erde u. Auftrag. Festschrift f. B. Kruske, Köln 1951.
- ⑧ Stil u. Ordnung der Sozialen Marktwirtschaft. In: Wirtschaftl. Entwicklung u. soziale Ordnung Festschrift f. F. Degenfeld-Schonburg, Wien 1952.
- ⑨ Artikel “Soziale Marktwirtschaft”, “Religionssoziologie”, In: Hwb. d. Sozwiss., Stuttgart, Tübingen, Göttingen 1952 ff.
- ⑩ Fragen der europäischen Integration. In: Wirtschaftsfragen der freien Welt. Festschrift f. L. Erhard, Frankfurt/M. 1957.
- ⑪ Mensch, Geist u. Geschichte. Gedanken zu einer anthropologischen Geschichtswissenschaft. In: Gestalt u. Glaube. Festschrift f. O. Söhnngen, Witten, Berlin o. J. (1960)

- ⑳ Gedanken zu einer sozialwissenschaftl. Anthropologie. In : Sozialwissenschaft u. Gesellschaftsgestaltung. Festschrift f. G. Weisser, Berlin 1963.
- ㉑ Wandlungen des Wissenschaftsideals im Blick auf Max Weber. In : Systeme u. Methoden in den Gesellschafts- u. Wirtschaftswissenschaften. Festschrift f. E. v. Beckerath, Tübingen 1964.
- ㉒ Europa, unsere Aufgabe. In : Möglichkeiten u. Wege zu einer europäischen Wirtschaftsverfassung, Berlin 1964.
- ㉓ Vgl. Die Hochschullehrer der Wirtschaftswissenschaften, S. 506.

〔一〕 雑誌類に掲載された論文

- (1) 「景気調整の手段としての信用政策」(一九二五年)^①
- (2) 「信用拡張および信用政策の諸形態」(一九二七年)^②
- (3) 「東欧の宗教社会学のために」(一九四五年)^③
- (4) 「社会的に見た諸経済秩序」(一九四八年)^④
- (5) 「我々の経済政策の根本問題」副題「市場経済への復帰」(一九四九年)^⑤
- (6) 「文化様式の形而上学のために」(一九四九年)^⑥
- (7) 「社会的諸宗派調停」(一九五〇年)^⑦
- (8) 「経済学と経済政策」(一九五四年)^⑧
- (9) 「欧州経済圏の様式と秩序」(一九五五年)^⑨
- (10) 「欧州景気政策の制度的諸問題」(一九五八年)^⑩

(11) 「正しい景気政策的行動法典考」(一九六一年)^⑪

(12) 「社会的市場経済の社会構造政策的指導理念」(一九六二年)^⑫

まず第一論文「景気調整の手段としての信用政策」は、『ケルン社会政策季刊誌』第四号に発表されたもの、また同じく信用政策を取扱った第二論文「信用拡張および信用政策の諸形態」は、『信用経済』に寄稿されたものである。以上の二論文は、終戦前に書かれたものであるが、以下においては戦後の諸論文を概観してみよう。

第三論文「東欧の宗教社会学のために」は、『世界経済アルヒーフ』に発表されたものであるが、量質ともに注目すべき労作と言えよう。ただし、本論文は、マックス・ヴェーバーの名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』における方法と立場を東欧に適用したものであり、その意味においてはヴェーバー前掲書を発展させたものであるとも言えよう。第四論文「社会的に見た諸経済秩序」は、新自由主義機関誌『ORDO』第一巻に寄稿されたものである。第五論文「我々の経済政策の根本問題」は、『財政アルヒーフ』第一一号に掲載されている。さらに第六論文「文化様式の形而上学のために」は、『全国家諸科学年報』第一〇五号に発表され、同じく文化社会学の領域に属する第七論文「社会的諸宗派調停」は、『世界経済アルヒーフ』第六四号に発表されている。第八論文「経済学と経済政策」は、定評ある経済週刊誌『フォルクスヴィルト』一九五四年第四八号に寄稿され、第九論文「欧州経済圏の様式と秩序」は、『経済学年報』第一六号に掲載されている。さらに第十論文「欧州景気政策の制度的諸問題」は、彼自身が設立したケルン大学付属経済政策研究所刊『経済政策クロニク』(以下クロニクと略す)(一九五八年)に発表され、第十一論文「正しい景気政策行動法典考」は『クロニク』(一九六一年)に、また第十二論文「社会的市場経済の社会構造政策的指導理念」は『クロニク』(一九六二年)に掲載されている。

注

- ① Kreditpolitik als Mittel des Konjunkturanaleises. In : Köhler sozpol. Vjschr. 4 (1925)
- ② Formen der Kreditexpansion u. der Kreditpolitik. In : Dt. Kreditwirtsch. (1927)
- ③ Zur Religionssoziologie des europäischen Ostens. In : Weltwirtsch. Arch. 1945.
- ④ Die Wirtschaftsordnungen sozial gesehen. In : Ordo 1 (1948)
- ⑤ Das Grundproblem unserer Wirtschaftspolitik : Rückkehr zur Marktwirtschaft. In : Finanzarch. 11 (1949)
- ⑥ Zur Metaphysik der Kunststile. In : Z. f. d. ges. Staatswiss. 105 (1949)
- ⑦ Soziale Irenik. In : Weltwirtsch. Arch. 64 (1950)
- ⑧ Wirtschaftswissenschaft u. Wirtschaftspolitik. In : Volkswirt. 1954. (Beilage zur Nr. 48 : Wiss. u. Wirtsch.)
- ⑨ Stil u. Ordnung des europäischen Wirtschaftsraumes. In : Z. f. Nat.-Ök. 16 (1955)
- ⑩ Institutionelle Fragen der europäischen Konjunkturpolitik. In : Wirtschaftspol. Chronik 1958.
- ⑪ Gedanken zu einem Kodex des richtigen konjunkturpolitischen Verhaltens. Ebda 1961.
- ⑫ Das gesellschaftspolitische Leitbild der Sozialen Marktwirtschaft. Ebda 1962.

(Ⅲ) 主要著書概説

さて、我々はミュラー＝アルマックの著述活動を概観したので、今や彼の主要著書を概観することにしよう。但し、以下においてはスペースの関係上、彼の代表作と見なされる著書のうち、二冊の論文集のみに限定して考察せざるをえないことを予めお断わりしておく。その他の著書および一九六四年以降の諸論文は、いずれ別の機会に考察されよう。それでは二冊の主要論文集を年代順に概観してゆこう。

(一)『宗教と經濟』(一九五六年)

本書は、ミュラー・アルマックが一九四〇年から一九六〇年までの二十年間に出版した宗教社会学およびヨーロッパ精神史に関する著書・論文を一冊にまとめたものである(但し二論文は本書のみに執筆された)。

周知の如く、欧州研究に関する限り、マックス・ヴェーバーの宗教社会学的研究が主として一七世紀末に至るまでの西欧精神史研究であったのに対し、ミュラー・アルマックの考察範囲は、西欧に限定せずしてさらに東欧にまで及び、時期的にも一八世紀から今日に至る広範なものである。その際、彼の精神史考察の特徴をなすものは、一八世紀から今日に至るヨーロッパ宗教史を「世俗化の過程」(Säkularisationsvorgang bzw. -prozess)として把握せんとする態度であろう。無論、かかる認識は必ずしも彼固有のものではなからうが、厳密な資料選択による考察は、ヴェーバーを思わせるものがあり、その点においては学問的にも高く評価されて然るべきものと言えよう。彼が本書を以て、文化科学あるいは精神科学を研究する者の多くが抱く問——すなわち歴史における「精神的諸力の影響力」(Macht, geistiger Kräfte)に対する問——を少しなりとも解明し、これに答えんとしたことは、彼自身が認めることである。しかし彼の場合、精神的なるものを重視することは、決して楽観論や宿命論に直結することを意味するのではなく、むしろ歴史を純粹に政治的・経済的観点から説明できると信じているような人々も自ら立てねばならぬ経験的研究成果の必要を要請せざるをえないことを意味する。かかる彼の問題意識はともかく、その結実としての本書に対し、当時も今もヨーロッパ各国において賛否両論が沸騰し、物議をかましたことは想像に難くない。

さて次に、本書全般に関して概説してみよう。まず第一に指摘さるべきことは、「様式概念」による考察が本書に

においても全巻を貫徹していることである。彼は、かねがね学際研究の必要性を痛感していたのであるが、かかる事情からして、当初から経済史研究に様式概念を導入することに多大の関心を持っていたように思われる。特に芸術史研究によって様式概念の重要性に着目した彼は、それを社会的・政治的領域にも応用する可能性を認めたのであった。かくすることによって初めて「ヨーロッパとは何か」の間に答える一つの有力な手がかりを掴みうる、というのが彼の終始変わらざる確信であったと言えよう。つまり彼のライフ・ワークは、彼自ら明言している如く「ヨーロッパ研究以外の何物でもない」^①のであるが、問題は「我々のヨーロッパの実存の背景および諸力の単なる歴史的叙述を超える分析」である。換言するならば、ヨーロッパとは、今日も現存する伝統や諸文化形態のみならず、正に「認識問題」そのものである。そして宗教改革以来の「信仰統一」が崩れてくるにつれて、ヨーロッパは正に「現代においても我々に迫ってくる問題——なかならず歴史の諸現実要因および諸理想要因が欧州の発展において如何に相互にかかわりあうかという問題——を吟味する比類なき研究分野」^②となっているのである。

ところで本書の出発点となったものは、彼みずから明言している如く、ヴェーバーの宗教社会学的研究であるが、それをミュラー＝アルマックがさらに発展させたことはすでに述べたとおりである。またヴェーバーが、歴史を規定するものは精神的なるものであるのか「実質要因」であるのかという大問題を提起したが、この大問題に対してもミュラー＝アルマックは積極的に取組んでいる。すなわち、彼は本書の経験的研究によって、歴史における精神的諸要因——なかならず宗教的要因——に対して従来以上に重要かつ本質的な意義が賦与されるべきであるというヴェーバーの認識をさらに一層広範囲に継承・発展させたのであった。但し、その精神的諸要因の影響力は、プラスにもマイナスにも作用するという意味で「両刃の剣」であることも忘れてはなるまい。本書においては、特にマイナスの作用

が重視された結果、彼は現代精神史を「世俗化の過程」と規定せざるをえなかったわけである。これとの関連で再び論及されねばならぬことは、ヴェーバーにとってと同様、ミュラー・アルマックにとっても、マルクス主義あるいは唯物史観との対決ないし超克こそ、ヨーロッパ精神史研究および宗教社会学研究の最大関心事の一つであったということである。

さて、最後に本書の現代的意義と役割とについて考察してみよう。一九五九年の初版から約十年後の一九六八年に再版が出た事実から察せられる如く、この大著は、西独国内は無論のこと、スペイン語圏をも含む欧州各国で大きな反響を呼んだのであった。それは、今日ヨーロッパで著しく加速された世俗化過程を理解するための重要な手引きの一つが本書によって与えられているという認識が普及したことを意味するであろう。さらに従来 of 伝統的価値観の崩壊は、諸連関——本書においては特に宗教史と経済史との関連——の包括的観察からのみ理解されうるといふ彼の認識は、今日の学際研究ないし学際関係論の基本認識に通じるものがある。かかる認識を有する著者は、彼が従事したヨーロッパ発展のための実践的な仕事においても、ヨーロッパ的実存の状態に対する洞察から「何世紀にもわたって内部闘争の状態にある欧州大陸に、その本質統一(Wesenseinheit)に対応する完結した形態あるいは包括的形態を与えることを許すような推論を見出し、またそれに適した新しい形成体(Gestaltungen)を発展させることに成功するときにのみ、我々は正しい道を見出すであろう」ことを信じて疑わないのである。

それでは以下において、本書に収録された著書・論文を簡単に紹介し、あわせて目次構成その他をも可能な限り紹介したいと思う。但し、スペースの関係上、十分な説明がなされなかつたことを予めお断わりしておく。

(1)『経済様式の系譜』(一九四〇年)

本論文は一九四〇年に初版、その四年後には三版を重ねた注目の書で、著者のライフ・ワークを基礎づけた貴重な労作である。ここには、もはやナチスに対する従来の態度は見られず、むしろナチスとの訣別の書とも解せられる苦闘の労作である。本論文は、その副題「一八世紀末に至る迄の国家・経済形態の精神的起源」が示す如く、宗教史および経済史の学際研究に立脚したヨーロッパ精神史研究であるが、特に「経済様式」なる概念を活用した開拓者的研究に特別の意義を見出すことができよう。なお本論文の構成は左記の通りである。

第一章 社会科学における様式思想 ① 経済体制研究の発展 ② 様式概念 ③ 構成 **第二章** 初期経済様式の系譜

① 魔術的世界像 ② 物活說的紀元 ③ 多神教 ④ 一神教 **第三章** 西欧的経済様式の系譜 ① 中世の経済様式

② 東方 ③ ヨーロッパ的近代 **第四章** 一六世紀から一八世紀までの諸国家形態と経済思维の生成 ① 近代経済様式

の精神的ルーツ ② 一六世紀から一八世紀までの様式範囲 ③ 国家実践の変遷 ④ 国家思维の系譜 ⑤ 経済学の系譜

⑥ 新しい経済形態の生成 ⑦ 企業形態の系譜 ⑧ 社会的思维の由来 ⑨ 結び (以上)

(2) 『東欧の宗教社会学のために』(一九四五年)

本論文は、前述の如く、東欧精神史研究には必要不可欠な労作と言えよう。それは、マックス・ヴェーバーの名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に比せらるべき性質のものであり、ヴェーバーの試論を東欧において試みたものと思われる。なお本論文の構成は左記の通りである。

I ビザンチンとローマ II 宗教社会学の諸経験 III 非正教の中間地帯 IV ギリシャ正教 V 東方教会の教義的特殊性とその社会学的意义 VI 国家的・社会的帰結 VII 東方の経済精神 VIII 成果と解釈 (以上)

(3) 『我々の文化形態の年輪』(一九四八年)

ミューラーマルク研究序説(大庭)

本論文の構成は左記の通りである。

第一の年輪「東洋と西洋」、第二の年輪「東欧と西欧」、第三の年輪「中世と近代」、第四の年輪「ドイツ人の生存圏」、第五の年輪「世俗への移行」、第六の年輪「人格から大衆文化へ」(以上)

(4)『神なき世紀』(一九四八年)

本論文は、そもそも一九四八年に出版された労作であるが、その後絶版となっていたのを本書が再録したものである。その内容は、副題「現代の文化社会学のために」が示している如く、現代ヨーロッパの文化社会学的研究であり、彼のヨーロッパ精神史研究において重要な地位を占めるものである。なお構成は左記の通りである。

I 現代の問題 II 世紀の解釈のために III 欧州史における世界的文化の宗教的背景 IV 我々の世紀の系譜のために
 V 信仰低下の諸法則 VI 世紀の精神的起源 ① 陶冶理想の原形 ② 国家理念の系譜 ③ 国民運動の由来 ④ 合理主義
 の理想 ⑤ 社会的思想 VII 世紀の像 VIII ニヒリズムの発現 IX 革新の諸力 ① 科学の状況 ② 新しき精神形態の徴候
 X 現代の召喚 XI 政治的形態 XII 経済的形態
 XIII 文化社会学的成果 (以上)

(5)『文化様式の形而上学のために』(一九四九年)

本論文は、生涯「現実主義的理想主義者」であった著者が「文化様式」なる概念を形而上学的・哲学的認識を以て基礎づけたものとして注目されよう。本論文の対象となる「文化様式」は、すでに終戦前の労作『経済様式の系譜』において社会経済史的に研究された「経済様式」なる概念をさらに拡充したものと解されよう。そのさい特に大きな役割を果たしたのは宗教社会学であり、それ故にこそ彼は、ナチスの現実に絶望して以来マックス・ヴェーバーの研究に専念するに至ったものと思われる。

(6) 『歴史における信仰の力について』(一九四九年)

本論文の副題は「宗教社会学的研究の諸段階」となっているが、その構成は左記の通りである。

- I 歴史的に有効な諸力 II 精神的眺望の発見 III ドグマと経済意識 IV 宗派と経済様式 V キリスト教的なるもの刻印力 VI 消極的な力 VII 信仰崩壊 VIII 世俗化された世界 IX 成果と解釈 (以上)

(7) 『社会的諸宗派調停』(一九五〇年)

本論文の構成は左記の通りである。

I 世界観を結合する社会理念の可能性について II カトリック的社会論 III 福音主義的社会論 IV 社会主義的理論

V 自由主義的社会理論 VI 結論 (以上)

(8) 『欧州統一——精神的・経済史的考察』(一九五一年)

本論文において、まず最初に留意さるべきは、「凡ゆる世俗化・国民国家的解体・個別化にもかかわらず今日もお共通の歴史的遺産が我々の内に作用している」という認識を有する著者にとって、まさに「欧州統一は歴史的現実(eine geschichtliche Realität) 以外の何物でもない」^③ということである。もちろんそれは、もはや「中世における如き議論の余地なき現実」ではなく、まさに「現在の我々に立てられる課題」しかも「我々が引受けることも断念することもできる課題」である。著者は本論文において、かかる課題の一面の考察すなわち「過去における統一としての欧州を見ること」を試みる。しかし著者にとっては、それが同時に「共通の運命に対する信頼を強めるため解決されねばならぬ学問的課題」のみならず「欧州を統一体に形成する実践的課題」でもあったことに注意を喚起したい。さらに留意すべきことは、我々は「欧州統一」とよばれるに値するものが何であるかに対する明確な洞察から出発する

ときにのみ」前述の課題を十分に果すことができるであろうということである。

(9) 『現代における宗教社会学の意義』(一九五九年)^④

本論文は、本書『宗教と経済』にのみ発表された労作であるが、右記の論題ならびに、その副題「その歴史の出発点・問題提起の意味・今日的課題」が示す如く、宗教社会学のケース・スタディというよりは、むしろ宗教社会学の総合的再検討とも言える労作である。

(10) 『ドイツ・バロックの植民計画と植民拡張の精神史』(一九五九年)^⑤

本論文も前掲論文と同じく、本書『宗教と経済』のみに発表された労作である。これは、いわばドイツ精神史のケース・スタディ的労作と言えるが、著者にしては珍しい分野の研究であり、一般的なヨーロッパ精神史研究の中で、彼以外の研究者にとっても極めてユニークな地位を占めるものと思われる。ちなみに、その目次構成を紹介すると左記の通りである。

- I 歴史的枠組 II 大なる植民化の陰にある帝国 III 植民勢力の特徴 IV ドイツ的諸力の内的束縛 V 大計画の時代
VI 偉大なる選帝侯とギセルス・ファン・リーア VII 帝国植民計画 VIII 宮中における計画(スピノラとヘルマン・フォン・バーデン辺境伯) IX ミュンヘンにおける協議 X 帝国理念と植民地政策に対するベッヒャーの働き XI 西インドにおけるフォン・ハナウ男爵の高地ドイツの植民 XII 当時の記録文書としてのベッヒャーの政治談話 XIII 帝国計画
XIV ライプニッツのエジプト論旨(Leibnizens Consilium Aegyptiacum) XV クールランドとブランデンブルグの領封国家的植民化 (以上)

なお詳細は筆者の書評を参照されたし。^⑥

- ① Religion und Wirtschaft, 1956, S. IX.
- ② *ibid.*
- ③ *op. cit.* S. 590. Vgl. S. 579—591.
- ④ Die Bedeutung der Religionssoziologie in der Gegenwart (1959). In: Religion und Wirtschaft, S. 1—14.
- ⑤ Geistesgeschichte der Kolonialpläne und der Kolonialexpansion des deutschen Barock (1957). In: Religion und Wirtschaft, S. 245—327.
- ⑥ 大庭治夫「ミューラー・アルマック著『宗教と経済』」(『世界経済』一九七九年五月号、四三—六四頁、所収)

〔二〕『経済秩序と経済政策』(一九六六年)

本書は、経済秩序と経済政策に関する彼の論文集であるが、大別して三部からなり、第一部は「経済秩序政策」、第二部が「国際経済政策研究」そして最後の第三部は「基本草案」で、この中には未公開のものも含まれている。なお本書は一九六六年に初版、それから十年後の一九七六年に再版が出ているが、それは本書が今日もなお、西独において重要な意味を持っていることを証明するものと言えよう。ところで、本書を通して彼の全思想体系の概要を知る上で注意を要する第一点は、彼の「社会的市場経済」(Soziale Marktwirtschaft)の「社会的」(sozial)なる概念が何を意味しているかということである。その第二点は、本書における一労作「社会的市場経済の第二局面」でクローズ・アップされる《Gesellschaftspolitik》なる概念である。このドイツ語は、日本語に直訳すると「社会政策」になってしまうが、これは従来の《Sozialpolitik》(社会政策)よりも遙かに広い意味で用いられているように思われる。そこで両者を区別するため、以下においては前者の新概念を「社会政策」あるいは「社会構造政策」と書き表わすことに

する。

次に、本書を読むさいに留意すべきことは、著者ミューラー＝アルマックがヴァルター・オイケンから多くを学んだにもかかわらず、基本的には終始一貫して「様式」(Stil)なる概念の下に国民経済を説明せんとしたことである。周知の如く、オイケンを中心とする「フライブルグ学派」は、彼等の新自由主義機関誌『ORDO』の表題「秩序」から察せられる如く、広義の「秩序」(Ordnung)なる概念の下に国民経済を説明せんとしたが、それに対してミューラー＝アルマックは意図的に「様式」なる概念を用い、国民経済をより、広範かつ歴史的に多種多様な経済形態を考察せんとしたのである。かかる彼の問題意識から、市場経済は純経済的なるものに止まりえず、いわば必然的に「社会的」ならざるをえなかつたと言えよう。この点、ミーゼスやハイエクの自由主義思想とは無論のこと、オイケンを中心とするフライブルグ学派の自由主義思想との間にも微妙な相違が存することは、本書においても明瞭である。そして、かかるミューラー＝アルマックの「市場」概念が、決して静態的なものではなく、動態的なものであることは、たとえば「社会的市場経済の第二局面」なる表現からも窺知できよう。そして最後に、彼自身「私の全研究はヨーロッパ研究以外の何物でもない」と明言している如く、経済秩序政策を西独一国のみに限定せず、常に全欧州の問題として考え続けた彼の問題意識を特筆したい。まさしくそれ故にこそ、彼はエアハルトと共に当初から欧州共同体(E.C.)の設立に尽力したのであった。かかる彼等ヨーロッパ人の思考様式・問題意識・歴史認識は、率直に言って我々日本人には充分に理解しえない事柄であるが、それらを少しでも知ることなくしては、何故ヨーロッパ諸国がE.C.を設立せんとしたかの問題や彼等の真意を理解することはできないと思う。これを経済的・物質的利益の観点からのみ解せんとすることは、ミューラー＝アルマックの精神を根本的に誤解することにならう。かかる意味からも、本書全体を通

じて終始一貫して流れているライトモチーフを読み取ることが彼を理解する上で何よりも肝要であるように思われる。それでは、本書に収録された諸論文を今までと同じように概観し、もって著者の根本思想を考察することにしよう。

(1) 『経済統制と市場経済』（一九四六年）

本書『宗教と経済』に収録されている著書『経済統制と市場経済』は、終戦の翌年に出版された第二版で、第一版は「社会的市場経済」の構想が未だ熟していなかったものと思われる。ここで展開されている理論の骨子は、ナチス経済をも含めた「統制経済」に対する批判と、その批判に立脚した「社会的市場経済」なる経済政策理念構築の新しい試みである。内容は、前半が「統制経済の吟味」、後半が「社会的市場経済」であるが、その構成は以下の通りである。

第一部「経済統制の吟味」

- ① 歴史的状況の変化における諸経済秩序
- ② 経済統制の理想
- ③ 経済的に見た統制
- ④ 完全雇用と景気政策
- ⑤ 貿易の統制
- ⑥ 技術進歩の保証
- ⑦ 戦時経済における検証
- ⑧ 統制の清算

第二部「社会的市場経済」

- ① 今日の経済政策の根本問題
 - ② 市場経済の意味
 - ③ 自由経済の評価
 - ④ 新しい経済政策形態の必要性
 - ⑤ 操縦された市場経済の諸原理
 - ⑥ 競争政策
 - ⑦ 価格政策
 - ⑧ 経済構造の形成
 - ⑨ 社会政策
 - ⑩ 建築・住宅経済の秩序
 - ⑪ 経営構造の影響
 - ⑫ 貿易政策
 - ⑬ 金融・信用・景気政策
 - ⑭ 結び
- (以上)

(2) 『社会的に見た諸経済秩序』（一九四八年）

本論文は一九四八年、ドイツ新自由主義機関誌『ORDO』の創刊号に掲載されたものであるが、その構成は左記の通りである。

I 問題とその歴史的背景 II 経済統制の社会的清算 III ユートピア的附着物 IV 従来 of 市場経済の評価 V 社会的市場経済の梗概 (以上)

本論文の全体を通して終始一貫、経済秩序に関する問題の所在と、その歴史的背景の解明、さらには「社会的」なる意味の正しい理解がライトモチーフになっている。ここでは、統制経済ないし経済統制の問題のみならず、社会主義の問題も取扱われており、彼が「社会的」なる言葉で表現せんとするものが「社会主義的」とは根本的に異なること、また両者の相違点も明らかにされている。なお、彼が「ナショナリズム」に対して戦前とは異なった見解を表明していることは留意さるべきであろう。彼いわく「ナショナリズムとマルクス主義的社会主義は、実践的で冷静な、且つ人道的でキリスト教的な社会改革を結局、後へ追いやってしまった」^①と。かかるナショナリズム論が西独に少なくないのは、もっぱらナチズムの後遺症によるものであろうか。

(3) 『諸経済秩序における依存と独立』(一九五一年)

本論文は、一語にして表現すれば「社会的市場経済」の社会学的研究ということができよう。その構成は左記の通りである。

I 諸経済秩序の理論における社会学的考察の前進 II 社会学的形態と経済秩序 III 個別的諸経済秩序の社会的構造 IV 現在の経済状況における依存と独立 V 原理的諸問題 VI 社会的形成の問題 (以上)

なお第三章は、さらに①リベラルな市場経済 ②権力化された市場経済(Vermachtete Marktwirtschaft) ③反市場経済的経済統制 ④中央管理経済に分けて考察されているが、ここで「権力化された市場経済」とは、価格形成、賃金、生産計画などに私的・公的権力が圧倒的な影響力を及ぼすために変質してしまった市場経済を意味する。本論

文における彼の問題意識は、経済学と社会学との間における学際研究の必要性で、それは彼の冒頭の言葉から察知されよう。^②

(4) 『社会的市場経済の様式と秩序』(一九五二年)

本論文の中心点は、様式概念と秩序概念を比較・検討することにより「社会的市場経済」がORDO自由主義よりも広い概念であることを明確にせんとしたところにあるように思われる。

(5) 『社会的市場経済』(一九五六年)

ここで彼が明言していることは、「社会的市場経済」が「新種の総合」(neuartige Synthese)であり、かつ「ドイツ経済政策の将来のための綱領」を意味することである。^③

(6) 『試練の十年を経た社会的市場経済』(一九五九年)^④

本論文は、著者が「社会的市場経済」の過去十年の歩みを回顧し、そこからさらに将来の展望を試みたものである。当然のことながら、彼は「社会的市場経済」が西独経済の再建と発展に成功したと確信しているわけであるが、将来の課題として社会的責任と欧州統合とを挙げているのは注目に値しよう。なお構成は左記の通りである。

I 社会的市場経済の発生史 II 市場経済と新自由主義 III 社会的市場経済——新「総合」 IV 様式統一 V 社会的市場経済の成果 VI 社会的市場経済反対論 VII 将来の課題 (以上)

(7) 『社会的市場経済の第二局面——その、新社会構造政策理念による補完』(一九六〇年)

ここで注目すべき点は、彼が初めて公的に「社会構造政策」(Gesellschaftspolitik)なる概念を導入し、これを「社会的市場経済の第二局面」の中心概念にしたことである。それを彼は一七のテーゼに要約して説明しているが、大要

は従来の社会政策 (Sozialpolitik) のほか環境政策・開発政策・インフラストラクチャー等を含む包括的概念と考へて差支えなからう。^⑤ なお、ここで特筆さるべきは、彼が「現実主義的理想主義」(realistischer Idealismus) の必要性を力説していることである。^⑥ ちなみに構成は左記の通りである。

I 初期状態 II 社会構造政策的諸問題 III 新社会構造政策の原理 IV 社会構造政策的諸目標 V 国家の課題 VI 経済政策および社会構造政策的課題としての自由な秩序の保証 (以上)

(8) 『社会的市場経済の社会構造政策的理念』(一九六二年)

本論文で注目すべき点は、「社会的市場経済」の思想的・精神的ルーツが、様式思想にのみならず「一九二〇年代に発展させられたダイナミックな理論と哲学的人間学ならびに他の国家観」に存すること、また「社会的市場経済」なるものが「弁証法的概念」であることを彼が明確にしたことであろう。^⑦ なお構成は左記の通りである。

I 社会的市場経済の理論と他の経済学 II 社会的市場経済の様式 III 社会的市場経済の社会構造政策的目標 IV 新社会構造政策の手段 V 社会的市場経済の第二局面 VI 社会的市場経済とEEC (以上)

(9) 『欧州統合の諸問題』(一九五七年)

著者は、まず欧州統合が具体的には「欧州諸国家の統一」したがって「その経済政策および市場の統一」を意味することを明確にし、かくて統合の必要性を力説するのであるが、なかならずその精神面を強調してやまない。いわく「人は精神的なるものを看過するとき、欧州の課題の到達距離を誤認する」と。^⑧

(10) 『欧州景気政策の制度的諸問題』(一九五八年)

本論文の全体を終始一貫して流れている著者の認識は、西欧先進諸国は、今日もはや一国だけの景気政策を立案・

策定することができなくなっており、そのため各国がECの一員として自覚をもち、国際協調の精神に基づいた共同の景気政策を考慮する時期にきている、というものである。ここで注目すべきことは、彼が本論文において初めて公に「景気局」(Konjunkturboard)の創設を提案したことであろう。なお構成は左記の通りである。

I 景気政策の出発点 II 現状分析 III 欧州景気局の目標 IV 欧州景気政策機構の機能方法 V 手段調達の問題
VI 景気局の作業方法 VII 制度的諸問題 VIII 結び (以上)

(11) 『正しい景気政策行動法典考』(一九六一年)

本論文の中心点は、「景気政策は主に各国の責任であるが、さらに国際協調によって補完されねばならぬ」という著者の基本認識であろう。なお構成は左記の通りである。

I 経済政策の基本的目標設定 II 各国のための、特定の景気情勢から独立した一般原理 III 高景気における諸原理と行動規則 IV 不景気における諸原理と行動規則 V 債権国・債務国に対する特別の原理と行動規則 VI 景気政策の内部調整と景気政策用具の改善のための規則 VII 景気政策の国際的調整のための方式規則 (以上)

(12) 『EECへの欧州諸国連合の問題』(一九六二年)^⑨

本論文の主旨は、オーストリア工業連盟にEECの理念と実態とを認識させること、また中立国であるオーストリアにEECとの関係を「連合」の形で強化・発展させる必要性をアピールすることにあつたと解せられる。

(13) 『欧州と南米の関係の財政・貿易政策的諸問題』(一九六二年)^⑩

本論文においては、就中「開発援助は真のパートナーシップの問題であるが、南米諸国は他の発展途上国同様、特に法的・政治的・精神的・教育上の諸前提の分野において大なる努力を払わねばならぬ」ことが強調されている。

(14) 『欧州景気政策』(一九六四年)⁽¹¹⁾

著者は、本論文の主旨を結論部の一節に表現していわく「すべての兆候は今や、欧州における多元的景気政策を屋根として国際的諸施策の上へかぶせる時にきていることが事実であることを証明する。これらの兆候は将来、年と共にますます統一的市場、拡大された市場の定言的命令に服することになる」と。

(15) 『共同市場の経済秩序』(一九六四年)⁽¹²⁾

本論文において留意さるべきは、彼が「現代の世界経済的諸問題」と称するものであろう。そのさい「干渉主義」など幾つかの問題が挙げられているが、その中でも彼が相当のスペースをさいて取り扱っている問題は「計画化」であり、それが欧州全体に拡大することこそ彼にとって最大の問題の一つなのである。⁽¹³⁾

(16) 『欧州関税同盟創設案』(一九六〇年)⁽¹⁴⁾

本論文は、本書のみに発表された労作であるが、その構成は左記の通りである。

I 欧州関税同盟の諸目標 II 構成の諸原理 III 農業 IV 商業政策 V その他の調整と米国およびカナダに対する関係 VI 欧州の開発途上国の問題 VII 英国の諸問題 VIII 制度的諸問題 IX 交渉形式 (以上)⁽¹⁵⁾

ここで著者は「欧州関税同盟が第一に欧州の政治的統合の前提としての経済的統合に導く」ことを特に強調し、然る後に米国やカナダ等の大西洋先進国との関係、また他方において発展途上国との関係をも改善すべく努力することを述べている。かかる構想は、そもそも彼の出发点が、EECとEFTA(欧州自由貿易連合)との関係の問題であったことに想到すれば、容易に首肯されえよう。⁽¹⁶⁾

(17) 『欧州における政治的協調強化のための提案』(一九六四年)⁽¹⁷⁾

本論文も前掲論文と同じく、本書のみに発表された労作であるが、その構成は左記の通りである。

I 内輪の協議のための解説 II 情勢判断のための一般的考慮 III 政治的協調の形態 IV 欧州における協力強化の目標設定 (以上)

ここで注目すべきことは、従来の国際協調のほかに東方政策が加わったこと、物質面のみならず精神面での協力も取扱われていること等であろう。

(18) 『EEC、EFTA間の交渉のための構想』(一九六五年)¹⁹⁾

本論文における著者の見通しは比較的明るく、最後に著者は、EFTAが関税同盟の構造に接近し、かつ、EECとEFTAに対する米国の態度が公平になれば、従来の問題は解決されるであろうと述べている。²⁰⁾

(19) 『将来の欧州統合のための構想』(一九六五年)²¹⁾

著者は、本論文において「危機の克服のために」という副題の下に欧州統合の道を考える。但し、ここで彼が「危機」というのは、欧州統合に対するフランスの拒否的態度を示唆している。²²⁾かかる「危機」を克服するため著者が力説することは、各国の国益と欧州統合とは背反関係ではなく、むしろ相互依存関係にある故、各国が国際協調の精神を持つように、という一文に要約されよう。

なお詳細は筆者の書評を参照されたい。²³⁾

注

① Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik, 1966, S.176 u. S.199.

② Vgl. op. cit. S.203.

- ㉓ Vgl. op. cit. S.248.
- ㉔ Die Soziale Marktwirtschaft nach einem Jahrzehnt ihrer Erprobung (1959). Vgl. Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik, S.252 f u. S.254.
- ㉕ Die zweite Phase der Sozialen Marktwirtschaft. Ihre Ergänzung durch das Leitbild einer neuen Gesellschaftspolitik (1960). Vgl. Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik, S.289 ff.
- ㉖ Vgl. op. cit. S.288. Vgl. Müller-Armack, Staatsidee und Wirtschaftsordnung im neuen Reich, Berlin 1933 S.31.
- ㉗ Vgl. op. cit. S.297. u. S.315.
- ㉘ Vgl. op. cit. S.324.
- ㉙ Zur Frage der Assozierung europäischer Staaten an die Europäische Wirtschaftsgemeinschaft (1962).
- ㉚ Finanz- und handelspolitische Fragen der Beziehungen Europas zu Lateinamerika (1962).
- ㉛ Europäische Konjunkturpolitik (1964).
- ㉜ Vgl. op. cit. S.400.
- ㉝ Die Wirtschaftsordnung des Gemeinsamen Marktes (1964).
- ㉞ Vgl. op. cit. S.411.
- ㉟ Plan zur Errichtung einer Europäischen Zollunion (1960).
- ㊱ Vgl. op. cit. S.419.
- ㊲ Vgl. ibid.
- ㊳ Vorschlag zur Stärkung der politische Kooperation in Europa (1964)
- ㊴ Konzept für Verhandlungen zwischen der EWG und der EFTA (1965).
- ㊵ Vgl. op. cit. S.452.
- ㊶ Konzeption für die künftige europäische Integration (1965).
- ㊷ Vgl. op. cit. S.453 ff.
- ㊸ 大庭治夫「シユラール著『経済秩序と経済政策』(『世界経済』一九七九年二月号、二八一―四四頁)

五 結語

最後に本稿を結ぶにあたり、再度ミュラー・アルマックを特徴づけることを試みたいと思う。かねがね筆者は、彼を「西独におけるドイツ歴史派経済学最後の灯」、*「現実主義的理想主義者」*、*「第二のマックス・ヴェーバー」*と称するのを常としてきた。彼自身は、かつて「理論的・実践的学としての国民経済学なかんずく国民経済政策論」に没頭し、まさしく「職業としての経済政策」に生きた自分の歩んだ道を振返って「おそらく私の労作の多くは、科学者にとっては余りにも実用すぎ、また政治家にとっては余りにも理論的すぎるであろうが、私は、我々の学問が究極的には実際のな意図においてなされねばならないと信ずる」と述べ、さらにまた「私が私の宗教社会学的研究においてなした如く、宗教的諸力に対して社会経済史における圧倒的な意義を賦与する者は、経済を超えてその彼方に在る諸力と価値を看過することはほとんどないであろう」と言っている。誠に至言である。

次に、彼の全労作を概観して明らかなのは、たとえ迂余曲折はあったにしても、彼の中心テーマがヨーロッパ研究であったこと、また学際研究ないし学際関係論にも通じる統一的・総合的認識の探究であったこと、これである。かかる問題意識から生じたものが宗教社会学的研究および様式概念研究だったのであり、かかる基礎研究に立脚して展開されたものが「社会的市場経済」であった。しかし、かくして西独の文化科学あるいは精神科学に大きな貢献をなした「第二のマックス・ヴェーバー」は、もはやこの世にはいない。だが彼の精神は、決して没することはないであろう。(一九八〇年六月三十日記)

注

- ① Müller-Arnack, Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik, S. 15.
- ② op. cit. S. 12.
- ③ 大庭治夫『文化価値と政治経済』文真堂、一九八〇年、八五―一二七頁を参照されたし。
- ④ 大庭治夫、前掲書、一〇三―一六頁を参照されたし。